

杖

山形一生

飛行機に乗って、私を空の世界へと出迎えるのは、他でもなくモニターだった。そこには、今向かっている国の美男美女が映し出され、機内での注意事項が流れ始める。その国が誇るであろう、発展したオフィス群と、その夜景。広大なジャングルと動植物。その国で、笑顔で生活をする人々。今からあなたが向かうこの国には、こんなにも多種多様で、そしてこの国だけの、特有なものが広がっているのだと私に訴えてくる。この奇妙な映像が、異国へと足を踏み入れる為のチューナーとなって、私たちは調律を合わせていく。そして、今から私はマレーシアに行こうとしている。

座席ポケットに押し込められた機内パンフレットを見ると、ナシゴレンだとか、ミーゴレンだとか、少し聞き覚えのある料理名が載っている。「ナシ」は「お米」で、「ゴレン」は「炒める」という意味だそう。ならば、差し詰め「ミー」とは「麺」に違いない。「マレーシアに行ってくる」と私が友人たちに話すと、彼らは「水に気を付けろ」とか、「生野菜だけは食べるな」とか、私のお腹の心配をたくさんしてくれた。そういった助言もあり、私は食事に対して多少ナイーブになっていたものの、ひとまずは「ゴレン」がつく料理名であれば安心であると、その言葉を覚えるように復唱した¹。機内食以外にも、パンフレットには、ジャングルに隣接したホテルの案内や、カラフルな鳥の写真などが載っている。このような動植物の写真は、どれも彩度が高く設定されており、私たちの目を強く惹きつける。

およそ7時間ほどで、クアラルンプール国際空港に到着する。長時間の着席で身体中がぎくしゃくとしており、足がむくんで靴が窮屈に感じる。周囲の看板に日本語の表記はなく、聞き慣れない音ばかりが聞こえる。外国に来た、という感じがする。港内の天井は有機的なメッシュ構造をした形になっており、現代的で、清潔な空間となっている。所々にヤシやモンステラといった、私たちが「熱帯」を想像する植物が飾られ、サイネージモニターからは国立自然公園や滝の映像が映し出されている。そして、自然の映像はどれもスローモーションの編集が施されている。

私たちは、クジラがあの巨体を、空中でうねらせて、勢いよく海面へと叩きつけることを知っている。花が、どのような動作で開花するのも知っている。サバンナで走り回るチーターが、どのようにトムソンガゼルを狩るのかも知っている。この知識は、ビデオカメラによる長時間撮影、スローモーション加工、モンタージュなどの編集を通過した映像鑑賞の経験によって培われている。私たちは、奇妙に自然を見つめている。もはや、今日において映像経験を持たずに自然を感受できる者は居ないといっても過言ではないほど、自然と私たちの関係は、映像と折り重なって結ばれている。

空港からバス乗り場へ移動し、市内で最も大きいバスターミナルに向かう。周りに観光客はほぼいない。少し心配になってくる。これから私はバスに乗り、5時間ほどかけて、都内からずっと

¹ しかし結局のところ滞在中は腹痛続きであった。

離れた田舎の方へ移動する。長距離バスの乗車前に食事を済ませておくことにした。ペットボトルの水は日本の約3分の1程度の物価であり、この暑い環境で気兼ねなく水分を取ることができるのは有り難い。そしてマレーシア料理はとても美味しいものであった。見た目の印象よりもずっと癖のない、多くの人がすんなりと楽しめるような、角が取れた味わいになっている。おそらく、マレー、中国、インドの人種が重なり合うこの国だからこそ、各民族それぞれの食材や調理法が影響しあって、万人に食べやすい料理となっているのだろう。

私が今回マレーシアを訪れたのは、ある村に行くためである。標高の高い熱帯雨林の山道に、その村はあるらしい。辺鄙な場所にも関わらず、ある目的のために世界中から人々がその村に訪れている。無論、近くに泊まれる宿はない。村から最も近い町の宿で一泊した後、今にも壊れそうな錆だらけのバスに揺られ、ようやく村へと到着する。私が村の入り口に近づくと、複数の村人が私を目掛けて押し寄せ、当然のようにビニール袋や空のペットボトルに入れられた、図鑑でしか見たことのないような昆虫を見せてくる。この村にわざわざ外国人がくる理由はそれしかない。この村は昆虫採集で生計を立てている。

1990年以降、自然ドキュメンタリーや動物番組の氾濫に呼応するように、日本では「エキゾチックアニマル」や「奇虫」といった紹介のされ方で、一風変わった動植物が多く流通し始める。現在では国内各所で生き物の即売会が毎月のように行われ、オークションサイトで100万単位の取引がされることも珍しいことではなくなった。インターネットの後押しも相まって流通は過激化し、かつて手に入れることは不可能とされた生き物は、今では即日配達となった²。私自身もまた、そういった流れによって生物飼育を趣味とする人間の一人であった。この村は、機内パンフレットなどの旅行案内に記載されているはずもなく、昆虫を趣味とする人々の間で情報が拡散され、何が始まりだったかも不明なまま、気づけば世界中の昆虫マニアが訪れるメッカとなっていた³。

村人たちは、私の表情をととてもよく見る。表情の一つ一つから、この得体の知れない異国人が、どのようなものに価値を見出し、金を支払うかを、とてもよく心得ている。彼らが捕まえてくる昆虫に少しでも興奮の色を見せようものなら、彼らは少し高めの金額を提示するだろう⁴。そして、村人から昆虫や標本を購入しようものなら、その情報は村中に瞬く間に知れ渡り、その売れた生き物から類推できる生き物を捕まえては、私に見せにきてくれるに違いない。もし、あなたが大きなムカデに反応しようものなら、そこからタランチュラやカマキリといったものを彼らは提示してくるだろう。彼らと私たちに共通の言語はないが、昆虫だけが私たちを繋いでいる。「欲しい昆虫の写真を見せてくれ」と私のiPhoneを指して彼らは言ってきた。あらかじめカメラロールに保存しておいた写真を見せると、村人たちは「これはいる」「これはいない」と、すぐに答えてくれる。写真を一通り見せると、慣れた様子で、「明日もきてくれ、捕まえておくから」と私に言った。

² 哺乳類や爬虫類などの生き物は、2013年より動物の愛護及び管理に関する法律の改正により、対面販売が義務付けられるようになった。その為、対面をせずに発送をすることはできない(対面後の発送は可能)。しかしながら、昆虫や両生類といった生き物は、その義務から除外されたままである。

³ 日本では2005年以降から当村の情報が流れ始めており、蝶の標本を専門とする採集紀行会誌によって広まった可能性が高いと思われる。

⁴ 値下げ交渉にも絶対に乗ってくれない。

私たちの生き物への関心が尽きることはない。タイムラインから生き物の映像が流れてこようものならば、それを観ずには居られないだろう。もはや現実で生き物を見る回数よりも、画面上で彼らを観察した回数の方が多いだろう。その経験の中には、本当にこんな生き物が地球上にいるのだろうかと思ってしまうほどユニークなものがある。

最近インターネットを賑わせた生き物として、アフリカ・レンカクが挙げられる。写真を見ていただけたら、それ以上語ることはもはや無いだろう。足が何本もある、青い額をした大変奇妙な鳥だ。アフリカ・レンカクは、サハラ以南のアフリカ熱帯域に生息しており、この足の正体は、親鳥の懷に隠れた雛鳥である。雛は小さい体格に対して足は大きく発達しており、それがこの奇妙な形態を生んでいる。この写真は瞬く間にSNS上で溢れ、音もなく去っていった。このような現象は、毎日のようにネット上で発生しており、すこし嫌気がさす瞬間ともいえる。人々の心を乱すような文言が添えられては、写真は次々と拡散されていく。



(fig1) アフリカ・レンカク (*Actophilornis africanus*) ©Charl Stols

続いて、「Sand Spider Hiding」という映像を観てほしい⁵。白くサラサラと乾燥した砂の上に灰色のクモがおり、器用な手つきで砂を掘った後、前足で自身の体に砂をかけて隠れる仕草をしている。この特徴的な仕草から、2010年ごろに大変有名となったクモであり、様々な二次加工がされ、拡散された。しかし日本では少し様子が異なり、その投稿タイトルは「コカイン中毒のクモ」となっている⁶。念のために補足しておく、決してそのような事実は無く、このように砂に潜伏する生態をしているだけである。実際の真偽がどうであれ、生き物に関する反響さえあれば、どこからともなく国内で流通がみられるようになり、そして高額に取引される。そんな流れが、ここ10年以上ずっと続いている。村人に見せていたスマートフォンのカメラロールには、ネット上で偶然発見し、保存した生き物の写真も含まれていた。写真をスライドする度に「いる」「いない」と言っていた彼らも、ネット上で見つけた写真が画面に表示された時には、くすつ、と笑っていた。

町と村を結ぶバスは、1日に行きと帰りの1往復分しかやってこない。道にはバス停などもなく、そこに人が居たら乗せてくれるような状態であり、到着する時刻も数時間はずれることもあるらしく、気を抜いて逃してしまうと大変なことになってしまう。気長にバスを待つ横目に、村人たちの生活が垣間見える。彼らは採集する際、私たちが慣れ親しんでいるような昆虫網は使わず、ビニル

⁵ Sand Spider Hiding (*Sicarius terrosus*), <https://www.youtube.com/watch?v=YtXPmWJcuZY>, 2020年10月にアクセス

⁶ 元々はyoutubeで投稿されていた「Spider Love Cocaine」という映像の転載からと思われる。現在その動画は削除されている。

コカイン中毒のクモ, <https://www.nicovideo.jp/watch/sm18937678>, 2020年10月にアクセス。

袋と竹棒で自作したと思われる網で、蝶を難なく捕まえている。周りの高い木々には、所々に足場が作られ、彼らは高い木の上にいる昆虫も日常的に捕まえているのが想像できる。私が今座っている椅子の横で、彼らは、数えきれないほど捕まえた蝶を、慣れた手つきで三角紙に包む作業を延々としている。この国の人ではない誰かに向けて昆虫を取り、世代を跨いでもこの作業をし続けてきたのだろう⁷。



(fig4) 蝶を三角紙に包む作業をしている村人

バスを待っていると、二人の外国人がやってきた。一人はイギリスから来た18歳の青年で、写真撮影を目的にしており、もう一人はスイスから来た博物館学芸員で、博物館に展示する昆虫を仕入れにきたらしい。イギリスから来た青年は私と同じく今回が初めての滞在とのことだが、スイスの学芸員はここに何度も足を運んでいるという。彼は私の靴や服装を見て、「そんな格好じゃあヒルに喰われ放題だな」と笑って呆れていた。イギリスの青年は、私たちにこれまで撮影した写真を見せ、早朝からずっと行動していると言った。早朝の寒い気温の時間帯は、昆虫たちの動きが遅くて撮影にもってこいとのことだった。スイスの彼は、慣れた様子で村人たちに延々と強い口調で標本にする昆虫の値段交渉をしていた。

バスは予定時刻よりすでに1時間以上遅れている。車のヘッドライトが遠くから輝くたび、道に出て確かめるが、バスが来る気配はない。陽が少し傾き始め、空は真っ赤に染まり始めていた。私は最悪のケースを想像し始めた。村人にお金を払えば、あの高床式住居に泊めさせてもらえるだろうか。バイクの後ろに乗せてもらって、町までいってもらえるだろうか。歩いたら何時間かかるだろう。それはそれで良い思い出になるかもしれないが、勘弁してほしい。私を含めた外国人らは、バスを待つことに疲れ、各々のスマートフォンを見て時間を潰している。周りにはいる村人も、私たちに昆虫を売る仕事をやめて、スマートフォンでゲームをしている。私は、村人たちがどのようなゲームをしているのか気になり、画面を覗き込んでみた。ゲームタイトルは分からない。彼は

⁷ 基本的には国外の昆虫マニアに向けたもので間違いはないが、後から知ったことによると、マレーシア国内の博物館やバタフライパークといった機関もまた、この村人たちから昆虫を購入しているとのこと。

両手の親指で画面に触れ、大剣を振り回すキャラクターを操作している。彼の操作で剣が振り回される度、画面から眩いエフェクトと斬撃音がする。とても見慣れた光景がそこにはあった。もはや陽は完全に暮れ、ジャングルからは漆黒が広がり始めていた。その暗闇の中、そこにいた人々が持つ画面の光だけが、煌々と私たちを照らし続けていた。

結局、2時間ほど遅れてバスは到着し、無事に宿に着くことができた。私は無造作にリュックを床に下ろし、少し休もうとベッドにもたれ掛かると、気づけば朝まで寝てしまっていた。部屋の天井には矢印の形をしたシールが貼られており、「KIBLAT」と書かれている。外からは、バイクの排気音と、聞き慣れない鳥の声が聞こえる。身支度をしようとベッドから出ると、シーツの一部が赤く染まっており、床には親指くらいの大きさになったヒルが転がっていた。

私は空港へと戻るバスに乗っている。結局、村にはもう一度行っただが、村人たちは私が見せた写真の昆虫を捕まえてはいなかった。長距離バスの悪路に揺られながら、ジャングルを窓から眺めている。緑一色の中、バナナの赤い花が見える。遠くに見える大きな木には、それを頼りに様々な種類のつる植物やシダが絡み合っている。バスの窓には、よくわからない羽虫が、水滴にひっかかって身動きがとれないでいる。ジャングルの区域を出ると、ヤシ畑が延々と広がり続けていた。バスの休憩地点では、植物の苗が売られている店があった。そこには日本でも大変よく見慣れた斑入りのポトスが売られている。ポトスの鉢には、何も支えになるものがなく、つるがダラリと宙にぶら下がっていた。

日本へと帰国する飛行機に乗る。座席のモニターからは、機内案内の映像が流れ始めた。桜柄のスカーフをした客室乗務員の指示で、歌舞伎役者と黒子が、非常用設備の装着を試みている。聞き慣れた言語が機内を満たし始める。耳栓をしようと思ったが、荷物入れのリュックの中に入れたままだった。4列座席の中央に座っている私は、隣の見知らぬ人に退いてもらわなければならない。声をかけるタイミングを伺っている内に、彼はアイマスクとイヤホンをして、深い眠りについたようだ。

2018年頃、村と町を繋いでいた唯一の交通機関であったバスが無くなったことを知った。なぜ無くなったのかを町の人に聞いてみると、「毎日の利用客が4-5人くらいしかいないんだから、そんなのノービジネスでしょう」と言っていた。今では彼らの村に行ける交通機関は無い。

本稿は2020年11月、「ビンダー 7号 特集: 自然」にて掲載された。